

私のなやみ

恒川武敏

人間は誰れでも悩みを持っていることは万人の認めるところである。悩みのない人は幸福であるということになると人間はすべて不幸であるという理論が成立することにもなる。

仏教では「人生は苦なり」として老若男女を問わず、生きる姿の中に苦を見出し、精進努力を樂として意義ある人生を送ることを説いている。しかし、現実社会生活の中で自分自身の事になると、いわゆる「足もとに火がついた」ということで他人事でない実感がこもってくる。

私も馬齢をかさねること六十七歳になった。世間並にいえば初老ということになる。ふり返ってみれば何一つ形のあつたものを造り上げたことがない。人生無為に過してきたかと思えない。この時、突然私を驚かせ、私の人生でこれだけ

は避けることもできず、ただ一つだけ造り上げてきたものがあることに気付いた、否、気付かされたという方が正確であろう。大ゲサに言えばこの驚きは決定的なものとして私の苦悩に変わって行った。それは人間ドックによる健康診断の結果である。

かねて家内が体の不調を訴えていた（五十歳代までは健康そのものであったが）ので友人に勧められ、その友人と一緒に人間ドックに入り、二、三個所の悪い所を指摘され、かかりつけの開業医に投薬してもらい、次第に元氣を取りもどしてきた。それ故家内は私に人間ドックに入って精密検査を受ければ安心できるから手続をなさいと再三進めるので、何処も悪いところがないが、氣が進まぬまま電話で申込をした。

案外早く、私の都合のよい日が取れた。人間ドックに入ってみると色々な人がきていた。八十歳を過ぎた人や体の不自由な老人や、二十歳代の若い人もきていた。これらの人と私自身の健康状態とを自分ながらに比較してみると、まだまだ私は大丈夫元氣であると思った。特に呼吸機能は検査の時に「肺活量は普通以上ですよ」といわれ、予想通り体に異常はないと益々確信するようになった。この検査の結果の成績判定及び指導を受ける日が通知されてきたが、他の用事と重なり、家族の誰れも病院に行つて聞くことができなかったので、成績表を郵送してもらうように電話連絡をした。その時、電話に出た人が「不審な点があったら来院して下さい」と親切につけ加えてくれた。一週間後郵送してきた成績表には九箇所が悪い所が記入され、指導要項も簡単に書かれていた。

これを見て先づ私の頭の中に浮んだことは、私の父も兄もガンで死んでいるので、あるいはガンかも知れない!と思つた。病名は肥満、高脂血症、高血圧症、冠不全、軽度の腎障害、裂口ヘルニアⅡ胃角部粘膜不整、高アマラーゼ血症Ⅱ脾疾患の疑、LDH、ALP増加、内痔核ということで、専門医学知識のない私には内容がよく分らないので、早速かかり

つけの開業医に相談した。医師は要するに肥満体であるから、5kg減すようにすること、それには適応した運動をし、食養生、すなわち、塩分、刺戟物を取らないように心掛ける以外に方法はないといわれた。私自身高血圧(上一八〇、下一一六)で心配していたので、開業医に計ってもらったら、上(一六〇)、下(一一〇)ということで、投薬だけで当分の間様子をみることにした。

社会科学に立つて人間を眺めている私には不思議に思えてならなかった。それは血圧の高低が医師によってこれ程相違するのかな!常々、血圧測定時には下が百を越えた時には注意しなさいと言われていたので、高血圧には注意しなければならぬと常に思っていたが、どのような事をすべきかが明確でなかった。当分の間投薬を受けて薬を飲み食養生をすることにした。

人間ドックに入った時から約一カ月後に日赤病院より一枚のハガキがきた。それには一度精密検査を受けられた方が良いから一度来院して下さいということであった。これまた、開業医にハガキを見せて意見を求めたが、余りハッキリしたことを話さず、この病氣は持病のようなもので氣長に養生す

ることですね、という程度であった。私自身胃ガンを心配していたので、その点を尋ねたところ、裂口ヘルニア、胃角部粘膜不整という箇所があるが、それは、肥満からくるもので、直接今どうしなければならぬということではないでしょう、ただ、食道と胃とが連なる部分に影があるので精密検査をしてはどうかと言うことでしよう、と言われた。

私自身決心しなければならぬ時がきたので、思い切って日赤に行くことにした。そのハガキには検査前日の午後十時以後水及び絶食を厳守することになっていたので、病気を治したい一心から、厳守して行った。胃カメラを飲むことになり、その結果が直ちに判明し、医師から説明を受けた。それによると、食道と胃との接触部分が年令によって縮んできたので透視の時にその部分が影となって写されたが、胃カメラでは何等異常ありません。心配されているガンの方も、きれいなもので今のところ別に異常はないですよ、と言われ、秋空の晴天の如く、何とも言えないすがすがしい気分になって帰ってきた。行く時には入院して腹を切らねばならぬと覚悟していた私には全く予想外のことであった。

早速開業医に報告するとともに日赤から開業医宛の手紙も

あったので、開業医に会って相談したところ、「あなたも年ですよ、食養生と適度の運動以外に方法ありませんね」と静かに話をしてくれた。

この一カ月間は私にとって、否、年老いた私にとって一大警鐘となり、人生の再出発ということになった。それは青年を過ぎ、壮年もいつの間にか過ぎ去り、現実的には老年となっているということである。他人事としての老人はよく分っているつもりも、自分自身が老人となっていることに気がついたことは良いことであるが、私自身には未知の世界ということになる。

誰れもが未知の道は不安であり、恐怖でもある。しかも知らない道でも避けて別の道を行くことはできない。かつ、多くの人、凡ての人は「わが人生」として今迄通り変りなく過してゆくのである。これは他人事として一般化すればそのように見えるだろう。しかし、今自分がこれからのこの道を歩み始めたのだと思う時、残り少ない人生、必ず迫りくる死というものに対して無関心でいられようか。

私は身体的・肉体的なことに対する悩みが精密検査によって一応解決し、秋晴の如きすがすがしい気持ちになったが反面、

死期の近づいていることを知ることになり、新たな深い悩みをこれからの人生を如何に過すかの問題に到達した。ふと思ひ当るのは、前学長藤原了然先生の法話である。

三獸渡河の喩（たとえ）「善男子、恒河（印度の川の名）の水を三獸ともに渡るがごとし。兔と馬と香象なり。兔は底に到らず、水に浮かびて過ぎる。馬はあるいは底に到り、あるいは底に到らず。象はすなわち底に尽す。恒河の水とはすなわち十二因縁の河なり。声聞は渡るとき、なおかの兔のごとく、縁覺は渡るとき、なおかの馬のごとく、如来は渡るとき、なお香象のごとし。このゆえに如来と名づけて佛となすことを得。声聞縁覺は煩惱を斷ずといえども、習氣（じつけ）を斷ぜず。如来はよく一切煩の習氣の根原を抜く。ゆえに名づけて如来となす」（『優婆塞戒經』第一卷、三種菩提品第五）『現代人と仏教』藤原了然著 第一八四頁）

この仏教經典の譬喩を引用され、香象の如く河の底に尽す如く目標が明示されているが、私自身兔の如く、底に到らず、水に浮びて過ぎ去ってきた。いわゆる兔の河渡りをして歳月を経てきたにすぎない。ましてや香象の底を尽すが如きことはできない。

つらつら考えてみれば自分が可愛いという私自身とは何であるのか。社会科学言へば生存権を有する生物としての人間であり、個人ということになるが、それは他人にも通ずる個人であり、人間という一般論にもなる。或はまた親子・兄弟というように血縁關係を有し、地縁關係の中に存在し、社会の一員でもある、という個と全体とに關連する個ということになる。これらは一面的表現ということになり、歴史的存在であると同時に社会的現實的に生存する我ということになっても、なほ一側面ということになろう。すなわち、老いてゆく自分とは社会科学的思想のみにては解決し得ない一面を有することになる。あたかも、太陽が東より出でて、西に没し、夜を迎えて一日を過したという生活は體驗的には誰れしも理解する當然の事であるが、自然科学の理論から言えばこれは全く感覺的なことであつて、太陽の周囲を地球が自転しながら一周したことを一日として計算され、人壽何歳ということになる。

ここに科学の世界に住む人間は老いを眼前に控えて如何に決心すべきであろうか。『くらしのなかの仏教』（佛大通信教育部編）の中に「仏教と科学」として「仏教の教えを学問研

究の対象とするとき、いきおいそれは形而上学的な思想内容の解明ということになるから、宗教学や哲学や倫理学と同じ分野に入る。また現代の細分化された組織的な学問方法によるならば、科学は人文、社会、自然の三系列に分類され、仏教学は宗教学や哲学と同様に人文科学に入れられている。この場合の科学とは、合理的、実証的、客観的という尺度によって測定し得る学問のことである。しかし近代のヨーロッパ文明発展の大きなモーメントになった物理学や生物学を中心とする自然科学の発達で、現代の学問を成立させているところから、主として自然科学を意味しているようである。（中略）

二十世紀の現代の特徴を一言でいうならば、科学万能時代であるといふことができる。自然科学およびその応用である科学技術の進歩は実にめざましいものがある。現代とその科学とは、全く不可分離であり、われわれの日常生活のどの面をとりあげても、科学文明が生活のすみずみにまで及んでいる。（中略）それは、人間はなんのために科学を発達せしめたかということである。もともと科学文明とは物質文明であり、人間生活に幸福をもたらすべきものであった。科学の進

歩によって人類の平和を破壊し、不幸をもたらすようになれば、それこそ本末転倒で大変なことになるであろう。（中略）科学の真理は、客観的な真理であるにしても、そこには「善・悪」「楽・苦」「幸・不幸」「美・醜」というような規範的な価値概念は全く見出されない。利用の仕方によっては、人間にとって善でも悪でもなり得る性質のものである。ここに科学の限界をはっきりと認めねばならない。自然をメカニズムに解釈することはできても、人間の精神、すなわちヒューマニズムをメカニカルに理解することはできない。」（傍点筆者）と述べている。私はこれに反発するつもりはないが、仏教は科学（人文科学）でないとするならば、主観的、観念的のものとしているのか。また、利用の仕方によっては人間にとっては善でも悪でもなる性質のものとしている科学の性質はそのようなものか、という点が理解し難い。しかし、今私自身が決心しなければならない立場に立っている。同書は更に「ともかく、科学は人間によってコントロールされるべきものであり、科学自身も一つの仮説であって、科学の力のみではどうにもならないことがある。ここにどうしても、自身自身の立場に立った主体性の論理、すなわち、一般現象や客

觀的學問の場に還元し得ない論理の世界が人生において必要となってくるのである。しかも、それは科学と対立するものではなく、科学を包み、科学をリードするものでなければならぬ。『今の人類において、より急要なことは、科学の進歩よりも、人間の理性と良識の高揚である』と世界一流の科学者や思想家たちが言っているように、現代の危機は人間の理性と良識とが科学を支配し得ないところにある。」と記述されているが、科学の限界と人間の理性・良識との関係はどのように理解すべきであろうか。また、科学が人間の理性・良識に包まれたり、リードされるということは内容的にどういうことであろうか。さらに同書は「仏教は宗教として、ただ単に人間の意志や感情をゆさぶるだけのものではない。知恵の宗教と呼ばれるように、高き知性に基づく宗教である。人間と自然とを対立せしめて『もの』として自然を観察するのではなく、人間に即して自然を、自然の中に人間を全一的に見てゆくのであり、また実践をとおし、そのものの働らきをとおして、人間の正しいありかたを教えるものである。人間の理性と良識の根柢は、当然、仏教の知恵に求められなくてはならない。科学が第三者的立場であるに對し、宗教とし

ての仏教は第一者的立場にありながら、なお仏教的思想が科学をも包容すべきものであるというところに、現代における仏教の意義がある。

要するに、仏教と科学とを分けて考えるならば、科学は万物万象の法則を探求し、これを実証するものであり、仏教は万物万象の根本法則（これを仏教では縁起という）にしたがって、人間生活を正しくみちびく教えであるといえよう。」と結んでいる。

仏教は第一者的立場にありながら、なお仏教的思想が科学をも包容すべきものであるとして、今私自身、持病を持った初老（新しい開拓的なものがない者）の自身はどうすべきであろうか。

同書の「仏教と生活」の中に「現代文化の特徴を一言でいうならば、物質文明、経済生活の文化であるということができる。これを資本主義文化といってもよいであろう。（中略）われが財産か、財産がわれか、まったくわからないのが現在の人間である。人間の心、人間の主体性とはそんな財産によって左右されるものではない。そういう経済力の束縛からの解放、さらにいうならば、自己の欲望や執着からの解放を説

くのが仏教である。心の自由とはこのことである。また、これが主体性の確立である。言いかえれば、生活を支配する眞の自己を發見せしめるものが仏教である」と述べている。

心の自由に基づいた正しい行為、眞実の生活といわれるが私自身の悩みの解決にはならない。何れにせよ、肉体的には老衰しつつ、肥満で高血圧であるこの身を何とかしなければならぬ。しかも他人事でなく自分自身の緊急事として日常生活の中に実施してゆかねばならない。心の自由に基づいた正しい行為とは、この際どうすることであろうか、眞実の生活とは私にとってどうすることであろうか。

医師の言うように毎日のように食生活において塩分をできるだけ少なくして、野菜食を多く摂ることにした。病人であって病人でないから、食生活も一定の処方箋のようににはゆかない。すなわち、心の自由に基づいた正しい行為とはならないことになる。否、眞の生活とはこのような意味でないかも知れないが、経済生活の中で、しかも科学社会の中に生きる現實的私自身悩み・苦しむのは当然であろう。いわゆる我はこれ凡夫そのものである。

健康維持のため、毎朝健康タワシでマッサージをしたり廊

下に健康ブラサガリ機を置いて、健康管理に腐心している。主体性の確立が仏教の教であるとするならば、このような主体性も眞の意味でないであろうが、私自身には笑えない唯一の方法として実施するより仕方がない。それで悩みが解決したことはないが、いづれにしてもしなないよりは心の安らぎが得られる。

同じ年頃の人から、健康管理の方法を尋ねたり、本を読んだり、テレビ等にて老人の生きる道を放映しているのを見たり聞いたたりしているが、未だこれだと確信できるものは得られない。

最近特に六〇〜七〇歳代の人で、私の知人が相次いで他界してゆく。若い頃健康そのものであった人や、案外病身であった人や永生きしていたな！と思う人達である。こうなると次は「おれの番か」という気がしてくる。主体性を持って、他人のでき事と自分とを結びつけず、心の自由なままに、眞実の生活を求めるべきだと心の奥底で叫んでも、感情的にはもう少し生き度いと願う心が先に立つ。無欲、無我の心境になれと天の声、地の導きがあっても、人間の愚さはどうすることもできない。それが自分自身であるからどうしようもな

い。

三獸渡河の喩にある香象の底に尽すことは到底不可能であるが、老いてゆく自分が今迄経験した六十七年間は私にとって何よりも尊いものとしなければならぬ。自分の先祖を過去帳で見ると約二五〇余年間に大人の男子は約七十五歳位で死んでいる。女の方は八十歳位まで長命であるが自分も長生きしたとして残り六く七年ということになり、寿命はそのような計算で生きられるものでないことも十分承知しながら、何となく、自分自身で、いつのまにかそのように思うようになる。そこで自分が今決心できるものは何んでもよいから、適度の運動をすることにした。

私は寺に住んでいるので、朝の勤行を三〇分位から四〇分位に延長し、その勤行の中に礼拝を取り入れ、五〇礼から六〇礼というように次第に増加してゆけば、自分の信仰とともに身体の運動になると決心して約一カ月余実行してきた。今の私にこの方法がもっとも適したものであり、大声を出して唱礼弥陀宝号を称えることが、いつの間にか楽しい時間となってきた。さらに朝の勤行だけでは物足らぬようになり、夜の勤行も始め礼拝を主体とした私の日課となり、これを実施

し継続することになっている。いつの間にか医師の所に行くこともやめ、また他人の意見を聞いたりすることもしなくなった。このようなことが自然と私自身の生活を規定し、高血圧も測定しなくなった。心の底では医者通い位はして、常に健康管理に注意せよと叫んでいるが、生活のパターンからはそれも例外となってきた。